

ケアセンターけやき

症 例 概 要 利用者氏名：N・Y様（70代・男性・要介護2）

利用期間：2016年11月～現在

既往歴：アルコール性肝硬変、活動性肺結核、腰椎圧迫骨折

経過：2016年11月より腰痛・廃用症候群改善目的にて利用開始。介入当初、ベッドで臥床、声掛けに朦朧としている。膝関節の拘縮があり、歩行は困難でした。トイレには這って行って、ほぼ寝たきりに近い状況でした。生活習慣を見直すために、アルコールの量を減らし、傾聴を行いながら身体機能改善を図り、今後は病を抱え限りある人生をどう豊かに過ごすのかを見い出せた症例

内 容

50年以上の喫煙習慣の影響で、動脈硬化が極度に進み、つま先のしびれが強く、自力での歩行が困難な状態。さらに、アルコール中心の食生活がたたわり、60代の時に肝硬変になる。

介入当初、訪問すると部屋はアルコールとタバコ臭が充満し、目も開けてられない状況でした。身体的にも両膝関節の拘縮があり歩行は困難で、トイレには這って行っており、ほぼ寝たきりに近い状況でした。

当初は、話しかけても朦朧としていることが多く、介入を重ねて行くことで、じっくりと話を聞いていくと、2年前にアルコール性肝障害で退院する時に、施設ではなく、在宅療養を選択した胸の思いを聞かせて頂きました。「もう70代だから本当は帰りたいけど、これじゃあなあ」と諦めの言葉ももらっていました。

そこでセラピストから生活習慣を見直すために、アルコールの量を減らすこと、じっくりと傾聴を行いながら何が出来るかを話し合い、身体機能改善を図る提案（毎朝3時間、車いすでの散歩）をしました。

提案を実施して行くことで、部屋に閉じこもってはい決して味わえない社会とのつながりが、Nさんの楽しみとなってきました。

「朝、散歩に行くとき、いろいろな人に声を掛けられるんだよ、おはようって」

「もしできるなら、死ぬまでに一回は故郷のM県に帰りたいな」との言葉もあり、今後はその故郷のM県に帰る事を目標にリハビリを頑張ることに現在は取り組まれるようになりました。

生きがいであった、飲酒や喫煙を適度に許しながら、ご本人が望む生活環境を整えたことで、Nさんは今、あらたな生きがいと目標を見出すことができるようになりました。

「だって死んだら、帰れないもんな、田舎の風景を見たいよな、田んぼの風景なあ」

散歩を通じて人とのふれあいを楽しみにしてリハビリに取り組まれています。